

[66] マラーホフの輝き

ダンサー&プロデューサー&振付家として

2004年5月8日 東京新聞 夕刊

バレエ・ダンサーに求められる資質の第一はダンスがうまいことだ。しかしそれに加え、人間関係や指導力といった社会性、また芸術の新しい動向を察知する感性、そして自ら新しい作品を生み出していく創造性に恵まれているとき、一人のダンサーが成し遂げる仕事は、相乗効果によって果てしもなく大きくなる。「マラーホフの贈り物2004」と題された三つのプログラムは、そのことを痛感させてくれた。

ウラジミール・マラーホフに世界が注目したのは一九八〇年代の末、彼はまだ十代の若さだった。彗星のように登場する、ということばがあるけれども、マラーホフはまさに存在そのものが彗星のようだった。細身の体が光り輝いて、美しい光芒を切り裂く。あまりに美しく完璧だったために、観客はそこに作為や工夫の跡を見つげる気にさえなれなかった。

しかし九二年にロシアを離れてウィーン国

[66] マラーホフの輝き

ダンサー&プロデューサー&振付家として

2004年5月8日 東京新聞 夕刊

立歌劇場へ移籍した後のマラーホフの歩みは、
彼が他の誰にも及ばないほど着実かつ雄大な
計画性と企画力の持ち主だったことを示して
いる。日本も含めて世界各地のパレエ団で客
演して自身のダンサーとしての感性を磨き、
ますます名声を高める一方で、パートナーや
スタッフなどの豊かな人脈を形成したのだ。

九九年には古典バレエの改訂を手がけて、
演出振付家としての活動も開始する。そして
三〇〇二年、まだ三十四歳の若さでベルリン
国立歌劇場バレエの芸術監督に就任。その年
の暮には、モナコ・ダンス・フォーラムのニ
ジンスキー賞で最優秀男性ダンサーの栄冠を
受け、現役ダンサーとしても世界でナンバー
ワンであることが保証された。

今回の「マラーホフの贈り物」では、彼の
ダンサーにしてプロデューサー、振付家とし
ての活動が集大成され、そこに人間マラーホ
フが星雲のように層を成して輝いているのを
見る思いだった。

[66] マラーホフの輝き

ダンサー&プロデューサー&振付家として

2004年5月8日 東京新聞 夕刊

ガラ形式のAプロ、Bプロは一堂に会するスターたちの出身が多様で、そのために演目の取り合わせが多彩、さまざまなスタイルを楽しむのが特徴だ。マラーホフの故国ロシアからは、ボリシヨイ・バレエとキエロフ・バレエのトップのスターが参加して、プティパ古典や、往年の名画で懐かしいラヴロフスキー版『ロメオとジュリエット』、レトロ・モダンの『黄金時代』を見せてくれた。

アメリカ出身のスターでは、以前アルヴィン・エイリーのカンパニーにいたデズモンド・リチャードソンが黒い肌と強靱な筋肉美で、アメリカン・バレエ・シアターで活躍したサンドラ・ブラウンと共に官能的な『アヴェ・マリア』を踊った。じつは彼ら、当初予定されていたメンバーの怪我のために急きよ、代わりに来日したのだが、新しいスタイルの作品にふれることができ、日本の観客には幸いだった。

だが一番の見どころは、やはりマラーホフ

[66] マラーホフの輝き

ダンサー&プロデューサー&振付家として

2004年5月8日 東京新聞 夕刊

自身の踊りである。日本では初めて踊った『バレエ・インペリアル』『アポロ』もさすが精密だが、『ヴォワイヤージュ』の表現の奥行き、『コート』の超人的な力技によって、今もおダンサーの花の盛り、いや上昇中でさえあることを証明した。「贈り物」特別プロとして、ヴィシニョーワと共演した『ジゼル』も、最盛期の二人がロシア・バレエならではの神秘性を見せた名演技として、長く記憶に残るにちがいない。

今後マラーホフに新たな局面が期待できるとすれば、振付家としての仕事だろう。この三月、ベルリン国立歌劇場で初演された『シンデレラ』のことは、日本にも報道もされたし、今回の来日でも清新なセミオノワとのパ・ド・ドゥで、その古典的でしかも新味のある振付を垣間見ることができた。もしマラーホフという木がこの方向に元気な若枝を伸ばすとしたら、将来どれほどの大樹になるか、想像にあまりあるというものだ。